



思い
揺らぐ



「最近、どうだ？」

駿しゅんに訊かれたとき、龍はなんと答えたらいいのかわからず、一瞬黙った。

「……うん、まあ」

「まあ、なんだ？」

「質問が曖昧だから、曖昧に答えたただけだ」

やっと、言い返した。

J R 鶴舞つるまい駅にあるドツールに、ふたりはいた。

名古屋大学鶴舞キャンパスでの講義の後だった。

駿のほうが龍を誘ったのだ。何か話すことがあるのかと思ったら、「最近、どうだ？」だった。

「曖昧かあ。うん、曖昧かと言われると曖昧だな。

おまえが」

「俺が？」

「この頃おまえ、変だぞ。なんかおかしい」

「おかしいって、どこが？」

「それが明確に言えないから曖昧なんだ。どこと

なく変だ。そこはかとなく変だ」

「なんだそれ？ おまえの言いかたのほうが変だぞ。もっと具体的に言えないのか」

「具体的に言うと、前年比かな。去年の今頃の鏡味龍は、こんなじゃなかった」

「入学したばかりの頃と今を比べられてもなあ」

「でも、俺の言う意味、わかるだろ？」

問いかけられ、龍はコーヒーを啜^すって間を置いた。それから言う。

「わからない……こともないか」

「やっぱり。それはやっぱり恋とか……じゃないな」

「ああ、違う」

「じゃあ、なんだ？」

「……ケンゾーさん」

「誰？」

「俺が受け持つてる献体のひと」

献体……解剖実習のために提供された遺体のことだ。

「献体の名前知ってるの？ どうして？」

「知らないよ。勝手にそう呼んでる、ていうか、実習中にいきなり、その名前が頭に浮かんだ。もしかしたらこのひと、ケンゾーさんって名前なんじゃないかって」

「根拠は？」

「ない」

「意味がわからん。勝手に名前を付けちゃったのか。それってでも、よくないだろ」

「いろんな意味でよくないな。本当の名前があったはずなのに、勝手にそんな名前を付けるなんて、献体の尊厳を傷付けることになる。してはいけないことだ」

「だったら——」

「でも、名前が浮かんじゃったんだ」

龍は言った。

「そしたら、もうあのひとのこと、解剖実習のための献体だなんて思えなくなった。ここに何十年か生きたひとがいて、そのひとが死んで今、自分はそのひとの体を切り裂いている。そんなふうに思ってしまうんだ」

「おいおい、それはいくらなんでも駄目だろ。あの龍、献体してくれたひとは医学の進歩のために死後も役立つとうという気持ちで自分の遺体を提供してくれたんだぞ。向こうは納得ずくで解剖されてるんだ。なのに解剖する側がそんなこと言っちゃかんがね。好意を無にすることになる」

「そうだよな。すごく悪いことをしていると思う」

龍は頷いた。

「解剖しながら俺、ごめんなさいって心の中で言ってる。こんな人間でごめんなさい。あなたの死を役立てられなくてごめんなさいって」

「役立てられないなんてことないだろ。おまえがちゃんとした医者になればいいんだから」

駿の言葉に、

「……うん、そうだよな」

龍はまた頷く。駿の意見が至極もつともなことなのは、自分にもわかっていた。でも……。

「それってやっぱさ、五月病ってやつじゃね？」

駿が言った。

「ちょっと考えるわ」

「何を?」

「おまえの落ち込んだ気分を変えるようなこと。

合コンとか」

「合コンなんて今どき流行らないだろ。それに俺、
そういうのあんまり乗り気になれないし」

「合コンを舐め^なちゃいかん。理想の彼女に出会う
かも」

「理想なんかないけど。そもそも彼女とかもな
あ」

「何言ってるんだ。名古屋めしの編集さんとはう
まくやってるくせに」

「だから、それは違うって」

「前もそう言ってたけど、だったらなんで一緒に
仕事してるんだ? この前はお手玉がどうとかつ
て意味不明なこと言ってたけどさ、正直なところ
おまえの話を聞いてると、その女と仕事してると
厄介なことばかりで全然楽しそうに思えないんだ
よな。どうなの、ほんとのところ? 楽しい?」

「うーん……今、楽しいかって訊かれると……」

「おまえの落ち込みの原因のひとつって、その平野って女にあるんじゃないの？ メンタル削られてるんじゃない？」

「それは……」

違う、と言いかけて、言葉が途切れた。

「DAGANE！」最新号は程なくネットで公開された。

「名古屋めし再発見」のページには生せんべいにかぶりついている自分の写真が大きく載っている。無防備なくらい幸せそうな顔をしていた。龍はなんとおもはゆも面映い気持ちになった。

記事では生せんべいの由来や食べかた——三層になっているのを剥がす——なども紹介されている。そして製造元の田中屋にインタビューした文章も載っていた。どうやら里央がひとりで取材に行ったらしい。記事はかなり丁寧に書かれている。もちろん、元康に恋して命を断なった女性のことを「勝手」などと表現してはいない。

あのときは仕事に対する熱意を失なくしたのではなかったが、これを見るかぎりではそんなこともないようだった。

よくわからないな、と思いながら龍はスマホを

切り、大きく伸びをした。顔を上げると、目の前の大きな噴水塔から噴き出した水の飛沫しぶきをひやりと頬に感じた。

名大キャンパスに隣接する鶴舞公園のベンチに、彼は座っていた。昼休み後、ぽっかりと空いたカリキュラムの合間に散歩に出たのだった。

今日は少し陽差ひざしが強い。でも汗ばむほどではなかった。こうしてぼんやりと過ごすには適当な気候だ。

あらためて噴水塔に眼を向ける。ローマあたりにありそうな古風なデザインだった。かなり昔のもののようにだ。

気がつくくと足許に数羽の鳩はとが寄ってきていた。多分このベンチに座る誰かが餌えきを与えているのだろう。

「悪いな。何も持ってないんだ」
声をかけると、まるでその言葉の意味がわかったかのように鳩たちは離れていった。

穏やかだった。このまま大学に戻りたくないな、と龍は思う。やっぱりこれ、五月病なのだろうか。

そんなことを思っていたとき、ベンチの隣に女性が腰を下ろした。七十歳くらいだろうか、少し時季外れな厚めのセーターを着て、スラックスを穿^はいている。どちらもあまり清潔には見えなかった。まだらに白い髪はぼさぼさのまま、ぱんぱんに物が入っているらしい青いビニールバッグを大事そうに抱えている。

女性はそのバッグからレジ袋を取り出した。その中にはラップに包まれたおにぎりが三つ。コンビニで売られているものではなく、手作りのようだ。女性はそれをいきなり食べ始めた。

そろそろ大学に戻らなければならぬ。渋る気持ちを抑えつけ、立ち上がろうとした。

「あんた」

声をかけられた。隣の女性だった。

「食べるかね？」

ぐいっ、とおにぎりを持った手を差し出す。

一瞬、言葉を失った。

ほれ、とばかりに女性はおにぎりを突きつける。

「あ……大丈夫です。お昼、食べたばかりなん

で」

やっこのことでそう言うと、立ち上がった。

「汚い婆はばあの握った握り飯なんか食えんか。腹を壊すか」

大声ではなかった。しかしその言葉の強さに戸惑い、龍は女性のほうを見ずにその場を立ち去った。

噴水塔を早足で離れ、テニスコートのあたりでやっと足を止める。

目の前に差し出されたおにぎりの白さが、網膜に焼きついたかのように脳裏から離れない。

自己嫌悪の波が襲ってきた。

朝、喫茶ユトリロはいつものように満席だった。一階には岡田夫妻と竹内たけうち、榊原さかきばらと常連たちが揃そろっている。

「龍ちゃん、おはよう」

美和子が早速声をかけてきた。

「まだ時間ある？ こっち来やあ」

と、隣の席に無理矢理龍を座らせた。

「あんたが載つとるの見たよ。なんて言ったかね？ ネットの」

「『DAGANE!』ですか」

「そうそう、それぞれ。相変わらずかっこよく写つとったねえ。あんた、俳優さんにもなれるわ。ええ男だで、絶対に人気出るて。仮面ライダーとかやればええのに。あれに出ると有名になれるんでしょお？」

「俺はその、演技とかはちょっと……」

「そんなもん、習えばええんだて。ねえ？」

と向かいに座る夫に同意を求める。

「大学はどうする？」

栄一が言うと、

「そんなもん、両立させればええがね。お医者さんと俳優を両方ともやればええんだわ」

「どっちも片手間にはできん仕事だぞ。選ばんといかん」

「ほうかねえ。じゃあ、どっちにしようかしやん？ お医者さんは安定しとるけど、やっぱり俳優みたいに華のある仕事もええけどねえ」

まるで自分の息子の将来を案じるように話しつづけている。

「ねえ敦子さん、どっちがええと思う？」

「そら、龍が決めることだわ」

敦子は即答した。

「自分がやりたいようにやれば、それが一番ええもんねえ」

龍は思わず祖母に眼を向けた。後ろを向いているので表情はわからない。

「俺は、この店の跡を継がせたい」

いきなり言ったのは榊原だった。

「この子なら、ええマスターになれるで」

「なに言っとるの」

敦子が振り返った。笑っている。

「こんな古い店、継いだってええことないわ。そもそもあと何年もつかわからんのに」

「そんなの、わからんで」

榊原が首を振る。

「ここは立ち退きの範囲には入っとらんのだろ？
だったらリニアができた後も残せるかもしれんが
ね」

「無理無理。リニアの駅ができたら、このへん一帯は全部再開発されるに決まっとるもん。うちみ
たいな店だけが残れるわけないでしょお」

「ほうかなあ。残念だなあ」

榊原が嘆息する。

「ここがなくなったら、俺はどこでモーニング食
えばええんだ？」

「代わりになんか新しい店ができるて。おしゃれ
でぴかぴかのが」

「そんなとこ、よう行かんわ」

「俺も、そういうとこは好かんな」

竹内が同意する。

「最近東口のほうにようけできとるだろ、コーヒ
ーのチェーン店とかが。ああいうとこ、気後れし
て入れんのだわ」

「ほだな。あっちのほうは、どんどんわからん場
所になってくわ」

「そう？ わたしは新しいお店ができて楽しいけ
どねえ」

榊原と竹内の会話に美和子が入り込む。

「ゲートタワーモールとかK I T T Eとか、ぶら
ぶら見とるだけで面白いがね。まあ、たしかに入
りづらいけど」

「駅西も、じきにああなる」

栄一が、ぽつりと言った。

「古いもんが消えて、新しいもんになる」

「寂しいねえ」

美和子が呟くと、

「でもね、昔はこの店も『新しいもん』だったん

だよ」

敦子が言った。

「戦争が終わって焼け野原にバラックが建って、それから商店街ができて賑にぎわって、ユトリ口もできて、その商店街が廃すたれてきて、それが今でしょ。そうやってどんどん移ってくんだわ。新しかったもんも古くなって消えてくのは道理だわね」

「そうだねえ。しかたないもんかもねえ」

美和子は嘆息する。

「やっぱり龍ちゃんには、新しいことをしてもらわんとねえ」

結局また俺の話に戻るのか。でも……と龍は交わされた会話を思い返す。そう、自分が決めることだ。ていうか、自分で決めて、この名古屋にやってくるはずだ。なのにどうして、こんなにも揺れているのだろう。俺は……。

「そうそう、さっきの話だけだね」

美和子が龍の物思いを打ち破る。

「あの記事読んで、うちでも久しぶりに食べたんだわ。生せんべい」

「……あ、そうですか」

「やっぱり美味しかったわ。子供の頃を思い出すわねえ。ねえ？」

と、また夫に声をかける。

「ああ」

栄一は短く答える。

「なのねえ、このひと、生せんべいを焼かせたんだに」

美和子と言う。

「焼いたあ？　なんで？」

すかさず榊原が口を挟む。

「知らんて。焼いたの食べたいって言うんだわ。

おっかしいでしょ？」

「生せんべいは焼くもんじゃないだろ」

「栄一さん、あんた変わつとるな」

榊原だけでなく竹内にも突っ込まれ、栄一は黙ってトーストを頬張った。

「あの」

龍はおずおずと、話に割って入った。

「それって、岡田さんが話をしてた件と関係ある

んですか。お母さんが生せんべいを焼いてお父さんと喧嘩になったという」

「まあな」

栄一は頷いた。

「あんたに話して思い出したんで、久しぶりに焼いたのを食べてみたくなったんだわ」

「そのことですけど、お母さんは生せんべいはそのまま食べるんだってことを知ってたかもしれないのに、岡田さんには焼いたものを食べさせたんですよね」

「そうだと思うが。なんでそんなことをしたのか、ようわからんがな」

「多分それって、お母さんが気遣ったんだと思います」

「気遣った？」

「岡田さん、子供の頃はお腹を壊しやすかったって言ってましたよね」

「そうなんだわ。しょっちゅう洩らしとったって」

美和子が言う。

「そのことを美和子さんに話したのも、お母さんですね?」

「そうそう」

「それだけ岡田さんのお腹のことが気になってたんですよ。だから生せんべいも、そのままでは食べさせられなかった。『生』という言葉がお母さんを躊躇させたんだと思います」

「俺が、腹を壊すかもしれんと思ってたか」

「はい。生せんべいは焼くものじゃないってことはわかってて、でも食べさせられなかった。怖かったんじゃないでしょうか」

龍が言うのと、栄一は少し考えてから、

「……そう言えば、おふくろは刺身とかもあまり食べさせんかったな。『あんたには生ものは毒だ』って言って」

「今でもあんた、あんまり刺身は食べんわね」

「小さい頃から食べとらんでな。なるほど、『生』だから生せんべいも焼いて出したのか。子供の頃からの疑問が今すつと解けた気分だわ」

栄一は少し笑った。

「おふくろも氣い遣いすぎだわ」

「そんだけ心配しとったんだて」

美和子も微笑む。そして、

「龍ちゃん、ありがとね。またひとつ、謎なぞを解いてもらったわ」

「いや、そんなに大層なことでも……」

龍が謙遜すると、

「いや、大層なことだて」

栄一が言った。

「胸の支えつかが降りた感じだわ。ありがと」

「あ、はい。その……じゃ、大学行ってきます」

龍は言い訳するように言って、ユトリ口を飛び出した。

謎解きなんかじゃないんだ。

足早に歩きながら、思う。

俺は、ただ……。

脳裏に浮かぶのは、鶴舞公園のベンチでおにぎりを差し出してきた老女の、あの声だ。

——汚い婆の握った握り飯なんか食えんか。腹を壊すか。

大学の講義を終えて帰ってくると、まだユトリ口は営業時間中だった。龍は店に顔を出して正直と敦子に挨拶あいさつだけして、家のほうへ廻まわった。

茶の間に行くと、卓袱台ちやふだいの前に千代ちよがちよこんと座っていた。

「ひいばあちゃん、ただいま」

声をかけると千代はこちらを見て、

「あれ、龍かね。大学、終わったんかね？」

「うん」

「ほうかね。おいなりさん作ったで、食べやあ」

千代が台所の冷蔵庫から出してきたのは、俵形ずしのいなり寿司ずしだった。

「今、お茶を煎いれるでね」

「あ、俺がやるよ」

「龍はさつと立ち上がり、茶の用意をした。

「ありがとねえ」

千代は細い眼をさらに細くして微笑んだ。

ふたりで茶を啜りながらいなり寿司を頬張る。
千代は皺しわの寄ったおちよぼ口で美味しそうに味わっていた。

「ひいばあちゃん、さっきここで座って何をしてたの？ テレビもつけずに」

龍が尋ねると、千代は口の中の寿司をゆつくりと咀嚼そしやくして飲み込み、それから茶を一口啜って、
「なんにもしとらんよ。お父さんと話しとっただけ」

「お父さん？」

一瞬、正直のことかと思う。だがすぐに違っていることに気付いた。

「ひいじいちゃんのこと？ 話すって？」

「お父さんの声が聞こえるんだわ」

そう言ってから、

「まだ、ボケとらんでね」

と一言添えた。

「思い出しとるの。まだここを建てたばっかで、お父さんもわたしも若くてねえ。一生懸命働いて、店を閉めてからここで一息ついて。今日は無事に

終わってよかった。でも明日はどうしようしゃん、仕入れができるか客が来るか、そんなことばっか心配しとったわなも」

「そんなに大変だったの？」

「まだ戦争が終わったばっかだったでね。もうB29から逃げんでもええけど、先行きはわからなかったで。日本も立ち直るかどうかもわからんし」

千代はまた寿司を頬張り、もぐもぐもぐ。ゆっくりと間を置いて話を続けた。

「でもねえ、お父さんはわたしほど心配しとらんかったんだわ。先のことなんかどうともなる、俺に任せとけば心配ないわってねえ。あのひとがそう言うと、なんか本当に心配なんかせんでもええのかって気になってまうんだわ。結局、あのひとの言ったとおり、ちゃんと店はやってけたしねえ」

「そうなんだ」

龍もいなり寿司を頬張る。甘辛く煮てしつとりと味の染みだ油揚げに酢飯の酸味が合わさる。

「美味しいよ」

龍が言うのと、千代は満足げに頷いた。

「ほうかねほうかね。口に合ってよかったわ。このおいなりさんはよ、わたしがお姑しゅうとめさんから教えてもらったんだわ。教えられたとおりに作って、敦子も昭光あきみつも宣隆も、みんな食べたんだに」

「へえ。何か特別な作りかたがあるの？」

「何も特別なことなんかないわね。お揚げを醬油しょうゆとザラメで煮て、酢飯を詰めるだけでねえ」

なるほど、雑煮ぞうじと同じく、基本的な料理について名古屋はすこぶるシンプルに作るようだ。しかしシンプルでも美味しいものは美味しい。龍はすぐにふたつ目に手を伸ばした。

それを口に入れた瞬間、またあのおにぎりを思い出した。このいなり寿司も手作りだ。なのに何のためらいもなく食べている。俺は……。

いやなことを考えそうになったので、慌てて千代に言った。

「あ、あのさ」

「なんでやあも?」

「その……この店、やってよかった?」

あまり考えないで口にした問いかけだった。

「よかったと思うよ」

千代は言った。

「なんとか食べていけたし、敦子も育てられたし、お客さんもぎょうさん来てちようだよあたしねえ。お父さんと店を切り盛りしながら、お客さんと話しとるときが一番楽しかったわ。コーヒーもいい匂いだし」

「そうだね。いい匂いだ」

「あんたも好きかね？」

「好きだよ。コーヒーの匂いも、ユトリ口の雰囲気も」

龍は言った。

「なんかさ、店にいればあちゃんがお客さんと話してるのを見るのが楽しい。それに……ちよつと羨ましいうらや」

「羨ましいって、なんで？」

「なんて言うかさ、ああいう人との付き合いができるっていうのが、いいなって。誰かを笑顔にしたり、美味しいって言ってもらったり、とかさ」

「ほうかね。龍は気持ちの優しい子だねえ」

「なんで。違うよ。優しくなんかないよ」

ちよつとむきになって否定する。

「俺は……たぶん、逃げてるだけだ」

「何から逃げとるの？」

「自分がやらなきゃいけないことから。大学で勉強することとか、医者になることとか……俺、自分が医者なんかになっちゃいけないような気がしてるんだ」

「何言ってるやあす。あんたは頭がええし、勉強もできるで、お医者様になれるんでしょお？」

「頭は……まあ、たしかにそこそこ良かったかもしれない。だから名大に受かったんだし。でも医学部に入れるだけの学力があったからって、医者に相応ふさわしいってわけじゃない」

「あんたは、お医者様になりたいと思っと思ったんでにゃあの？」

「うん……どうなんだろう？ よくわからないんだ」

「ほうかね。わからんかね」

「うん」

千代はまた茶を啜り、

「ほんだったたら、いっぺん止めてみたらええがね」

「止める？」

「止めてみて、それでもやりたやあって思ったたら、またやればええがね」

「そんな簡単に止められないよ」

龍は苦笑する。

「大学を休学するとか、そんなの無理だつて」

「なんでえ？ あんたまだ若いがね。なんべんでもやり直せるがね。わたしぐらいに歳としを取るまで、まんだ時間があるでしょお」

「でも……」

「道を間違えとると思つたら、もう一度始めからやればええがね。間違つたまま歩いてくより、よっぽどええがね」

そう言つて、千代は微笑んだ。

「お父さんもねえ、この店を始めるまではいろいろやつとつたんだよ。闇市やみいちとかでねえ。でも、前

に言っとったの。『俺は俺の人生の殿様だで、好き勝手にやる。誰にも指図は受けんわ』ってねえ」

俺の人生の殿様。

その言葉を頭の中で繰り返してみた。なかなかすごい言いかただ。

「ひいじいちゃんって、面白そうなひとだったんだな。会ってみたかった」

「わたしもお父さんを龍に会わせなかったわなもきっと気が合ったに違いないて」

龍は仏壇の横に掛けられている曾祖父そうそふ鏡味いなき稲造いなぞうの写真を思い出した。穏やかな顔立ちをしている。でも意外に頑固者だったのかも。

そんなことを思っているとき、スマホが鳴った。

「今の、なに？」

千代がきよときよとあたりを見回す。

「あ、LINEだよ。LINEの通知」

そう言ってスマホを取り出す。

里央からだった。また次の打ち合わせだろうか。アプリを開いた。

【突然で申しわけありません。この度、訳あって D A G A N E ! 編集から退くことになりました。短い間ですが、お世話になりました】

「え？」

思わず声が出た。

「どうしやあた？」

千代が訊く。

「あ……なんでもない」

言い訳して、急いで返事を打った。

【何があったんですか？ 名古屋めしの企画はどうなるんですか？】

すぐに返事が来ると思っていた。が、いつまで経っても龍が送ったメッセージは既読にならなかつた。